

美濃・尾張大地震明細図

美濃・尾張大地震明細図は縦36cm横50cmの大きさ1枚で、著者兼発行人が近藤寿太郎、出版社が名古屋秀文社で、明治24年(1891)11月8日に多色刷で出版された。地図中に震災強弱の記号付きの地名や崩壊地が示され、地図の周りには、岐阜・愛知両県下の惨状を極めた罹災地の視察記や、11月初め調査の両県郡別震災統計表、根尾谷変状略図・名古屋郵便局破壊図・岐阜市街ならびに稲葉山延焼図・大垣町地震大火図・名古屋市民避難図・枇杷島破壊図・震災死傷の罹図・負傷者救療図が載せられている。揖斐川以東で名古屋・犬山から関に至る線の西部から北西部域の色の濃い部分が震害の大きかった所である。

罹災地視察記事では枇杷島町・清洲町・一宮町・笠松町・加納町・岐阜市・大垣町の惨状が示してある。

枇杷島町では4km余にわたる市街地西側の櫛の歯のようにすきまなく立ち並んだ人家は、将棋倒しとなり焼失した。清洲町東入口の人家は50—60戸を残し、そのほか(450戸ほど)は転倒破壊した。これより一宮に至る12km間の村落は潰家がなかった。一宮町は約3,000戸ある尾張第2の商業地であり、その70—80%の戸数が倒壊したが、清洲ほどひどくなかった。これより黒田停車場の近くに行ってみると、完全な家は一軒もなく、北方村から美濃笠松町に至る木曾川堤防は火中で焼いた竿をひねりつぶしたようにひどく破壊していた。笠松町は商業繁華な地であったが、堤上堤下の人家は焼失し、まれに火災を免れたものでも転倒して完全な家はなかった。加納町は岐阜市に接した町で約80%倒壊した。

岐阜市は美濃国首府で戸数が約6,000あり、美しい繁華市街であったが、今回の震災で6か所から発火し、全市の90%が焼失した。その一望灰塵の中で金華山の翠壁が認められるのは不思議というか悲惨というべきか。

北方町は戸数1,000で全半壊が約80%の被害で

あった。この町の西端を流れる系貫川の水源地は根尾谷にあって、この谷は40kmも奥深く木材・段木などで有名であるが、谷の中央付近が夜明けがた鳴動が激しく、急にごう然震動し、方々の平野村落が陥没し山嶽は沈降して谷は深くなり、川も深くなった所が多かった。この谷奥の海拔約2,100mの権現ヶ嶽(現在白山)は震動で三段に崩れた。今回の地震の震源地は、まったくこの根尾谷の地盤陥没が原因となっているという。

大垣町は戸数4,000余で商業繁盛の地であったが、今回の震災・火災で全市を払い尽くし、ただ旧城の天主閣だけが残った。この町は先年の洪水で市民が困ばいし、また、今回の災害で終に旧形に復すことができずに全滅となった。死傷者が殊に多く、この上ない悲惨である。大垣町から今尾町・高須町・竹鼻町にきてみると、何れも70—80%の家が転倒破壊し、それらの町と町間の村落もまた同じように震害を被った。

ついでに言えば、名古屋から岐阜を経て北方町に至る方向は北々西に当たるが、名古屋岐阜間の鉄道線に沿って縦形に地面が亀裂し、所々噴水したため青色または鼠色の砂を地表に噴き出した。ことに岐阜金華山の如きは震動後1時間余もその麓の地は、所々に1升樽大の棒状をした噴水が約2mほど上がったという。

上記の事実は3日間の行程でわずかに一見しただけなので、その震害地の惨状を写すことが困難で、殊に、この印刷した震害線の地図において述べた記事は実状と違ったかも知れないが、その概況はすべて述べたと思う。ただ、名古屋市の記事はここに記載しなかったが、倒壊した郵便局・紡績所についてみると、その震害が強烈であったことが知られる。しかし、岐阜県の死傷者(地図記載震災表で死者4,089、傷者6,121)は愛知県の死傷者(同表死者2,351、傷者2,931)の倍であることを考えると、その惨状のひどさが知られるのである。

飯田波事／名古屋大学名誉教授

